

20年以上の伝統

日本でも希有な地域寄席

## 大念寺 念々寄席

今月は18日(木)18時

人気の花形落語家  
古今亭菊之丞 師匠

< 80 >

船橋市馬込町の浄土宗大念寺で、毎月中頃の木曜「念々寄席」が開かれている。同寺住職の大島祥明さんの発案で、20年以上前から毎月欠かさず執り行われ、全国的にもたぐいまれな地域寄席として有名だ。

大島住職によれば「当初は若手落語家の研鑽の場としてスタートした」とのことだが、今や若手真打ちの中でもダンツの気を誇る古今亭菊之

う環境の中で育ったという。

6月は21日に江戸情緒たっぷり、人気の花形真打ち古今亭菊之丞師匠と三遊亭天どんさんが出演。会場には125人を越す聴衆が集まつた。野田市からやつてきた石山かつ子さん(73)は「落語好き。全身、あらゆる手術をして、病気がちだが、笑いで生かしてもらつているようなもの」と、病気の素振りすら感じられないさわやかな笑顔で話してくれた。笑いは確かに病に効くようだ。菊之丞師匠は9月2日『芸曆二十周年記念公演』を三越劇場で開く。



念々寄席にご来場の皆様

丞師匠ら実力派が毎回登壇する。客層は20歳代から80歳代以上の老若男女、地域だけでなく、遠方から多くのファンが駆けつける。演目3題をたっぷり2時間かけて口演。常設の寄席では1人がせいぜい15分程度の持ち時間内で語るものだが、こでは一席が長講なので聞き応えがある。中入りに茶菓のものもあり、木戸銭300円は当初心から変わらぬ同寺の好意だ。「木戸銭の中には10円玉も混じり、地域の方々がこの落語会を、いかに楽しみにしていてくださるかが感じられてうれしい」と住職。大島住職の生家は大坂城代の寺。昔、寄席場を無くして困っていた上方の米朝、春団治文枝らの大物噺家が同寺で毎月落語会を開くとい



古今亭菊之丞師匠

大念寺外観

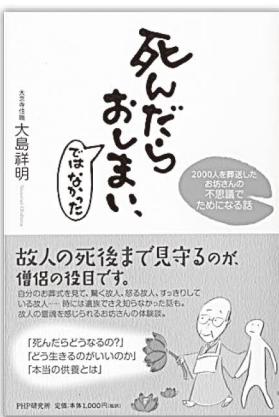


●大島祥明住職の評判の著書『死んだらおしまい』ではなかつた』は初版から9万冊を売り上げる静かなベストセラー。「死んだらどうなるの?」「どう生きるのがいいのか」「本当の供養とは」などに答える。同寺では大島住職のサイン入り本を購入出来る。

▽『死んだらおしまい、ではなかつた』(PHP研究所刊・定価1,050円。問い合わせ☎03-3956257)

2047-439-6547

▼東武野田線「馬込沢駅」徒歩12分。



故人の死後まで見守るのが  
僧侶の役目です。

自分がお式を見守り、見送る僧侶、すっかりして  
いる僧侶一人一人が、遺産でさえ受け取らなかった話。

故人の靈廟を感じられるおひさまの体験談。

「死んだらどうなるの?」「どう生きるのがいいのか」「本当の供養とは」

PHP研究所 定価 1,000円 (税込)

< 79 >